

恋の巣

立原正秋

新潮文庫

恋の巢



定価 240 円

新潮文庫 草 95 H

昭和五十三年十二月十五日 印刷
昭和五十三年十二月二十日 発行

著者 立原正秋

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区タマ町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二一
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

新潮文庫

恋の巢

立原正秋著

新潮社版

恋
の
巢

第一章

1

巢　　の　　恋　　の　　果
ことし三十歳になる新劇女優小牧梓は、ここ相模湾が一望のもとに見渡せる七里ヶ浜に越してきてから八年になる。

いまから十二年前、梓は金沢の高等学校を卒業すると上京し、劇団未来座の付属養成所の試験を受けた。首尾よく合格し、一年の養成期間を経て、未来座の研究生として在籍することが出来た。その年の秋、未来座は、新人公演としてラシーヌの「フェードル」を公開した。そのとき梓はアテネ王妃のフェードル役に抜擢され、新人としては異例とまで評された演技力を示した。王妃フェードルが義理の子イポリートに道ならぬ想いを懸ける場面、イポリートに拒まれ、王に彼を讒訴し、竟にイポリートは王のために非業の死を遂げ、フェードルも毒を嚙んで死を招く、この情欲の虜となった女主人公の性格を、梓は古典悲劇として完全に演じきったのであった。なによりも幸運だったのは、新進フランス文学者の生田俊行が、この新人公演のために「フェードル」を新しく訳してくれたことであつた。それは翻訳臭のしない文体で、「フェードル」の成功

は、なかばはこの訳文に負うところが多かった。

この公演が終る頃から、梓のまわりに男の取巻きが出来はじめた。それまでも取巻きがいなかったわけではない。夜、バーで働きながら劇団に通っていただけに、梓の若さと美貌に惹かれた男達がかかりいた。

東洋製粉株式会社の社長である尾山祐太郎が梓の庇護者になったのはその頃である。彼は最初、純粹の顧客として梓の前に現われた。彼は、若い頃芝居に熱中したが、父の許しを得られず、学校を出るとすぐ父の製粉会社に入り、いらい今日まで順調に歩いてきた財界人であった。しかし、芝居をやるうとした往時の夢はまだ彼の裡で燦々していた。とはいえ、いまさらその世界に足を踏み入れるわけにも行かず、いくつかの劇団を援助することで自分を慰めていた。例えば、公演パンフレットには、必ず東洋製粉株式会社の広告をだしていた。彼はその広告に、一流新聞に支払うと同程度の広告料をだしていた。純粹の新劇庇護者でない限り出来ないことであつた。

そうした彼が、金をだすから、バーをやめて芝居だけにちからを入れろ、と言ってくれたのである。条件はなにもなかった。このとき梓は二十歳になったばかりで、尾山祐太郎は五十二歳であつた。尾山祐太郎の純粹な意図を疑うべきものはなにもなかった。梓はバーをやめて尾山祐太郎の援助を受けることになった。そして、毎月の末、二人は銀座で落ちあつて夕食をともし、そのとき梓は金を貰う、という生活が二年続いた。

その二年目の秋の終り、尾山祐太郎は銀座のレストランで梓と落ちあつたとき、二カ月ばかり

ヨーロッパに行くってくるから、と言って翌月分の金をいっしょに梓に手渡した。そのとき、ヨーロッパならごいっしょにしたいわ、と梓が言いだしたのが、それまで保ち続けてきた二人の間を超えさせるものとなった。

二人がヨーロッパを旅行しているあいだ、日本では二人のことが醜聞の種として週刊誌に書きたてられていた。二人は十二月の末日本に還るまでそれを知らなかった。尾山祐太郎の旅行は私的なものであったから、会社でも、ヨーロッパをまわっている彼に知らせようがなかったのである。二人が羽田に降り立ったとき見たものはカメラの放列陣であった。

カメラは梓のアパートにまで追いかけてきた。

梓が再び尾山祐太郎と逢ったのは、あくる年の二月である。

「あたし、東京からはなれたいわ」

とそのとき梓は言った。

「芝居をやめちゃいかんよ」

尾山祐太郎は梓をなぐさめた。

「芝居はやめません。でも、東京からは離れたいのです。それより、あなたの方こそ大変だったでしょう」

「なに、私の方はたいしたことはない。取り屋といって三流雑誌の記者が金をたかりに来ただけだ」

「その人達にいちいちお金を出していらっしやるの？」

「いや。出す理由がないから一文も出さない。その点、私はきわめて合理的だ」

彼は多くを語らなかつたが、梓は、彼の家庭のなかを想像し、やはり大変だつたらう、と思つた。すでに他家に去つて子までなした娘がいたし、家にも息子や娘がいた。事実彼は家庭ではあれいらい孤立状態におちいつていた。彼の父は東洋製粉株式会社の会長としてまだ鬢髻かくしやくとしていた。

「馬鹿めが！ 女がいて悪いというのではない。こともあろうに女優とは何事だ。あれは芸人だ」

の
恋
と父は七十八歳とは思えぬ大声で彼を叱つたものである。尾山家は代々武士の家柄で、製粉会社をおこしたのは三代前の人であつた。つまり彼の父の言によれば、尾山家という十代以上も続いた輝かしい家名に染みをつけたのは芸人を囲つた祐太郎である、とのことだつた。

「劇団に通える距離でないといかん。鎌倉あたりの海岸に小さな家でも買おうか」
しばらくして彼は言つた。

「そうして戴いたけると嬉しいんだけど」

「さがしてみよう」

こうして移つてきたのが、いまの七里ヶ浜の家である。二百坪の土地に五十坪の家で、周りは松林であつた。

梓は十九歳の秋にラシーヌの「ヘフェードル」を好演して舞台女優として出発したが、その後つぎつぎとレパートリーをふやし、いまでは女としても幅が出来、未来座の中堅女優の一人になっていた。最近の好演は、去年の秋に新宿の厚生年金会館ホールで開いた創作劇の「春のいそぎ」で、小説家の秋篠弘毅が、梓のために書きおろした彼としては始めての戯曲であった。戯曲のあらすじは、旧家の末裔であるいとこ同士が、現代の荒っぽい時世に合わず、竟に心中する、という悲劇で、梓は、若い女主人公の役を演じて好評だった。

公演中、秋篠弘毅は一日として欠かさず劇場に通い続けた。梓は、自分に向けられた秋篠の視線を知っていた。美貌の舞台女優として十一年、たくさんの男たちから愛されてきた経験を持っているだけに、げんに自分が彼から愛されているのを感じとるのは造作もないことであった。

公演が終った日、梓は、秋篠とのあいだにやさしい感情が通いあっているのを自分の裡に発見して愕然とした。常に渝らぬ尾山祐太郎の、父にも似た視線を知っているだけに、梓ははじめ秋篠に向けられた自分の感情を嘘だと思った。多くの男たちに愛されてきながらも相手に愛情を感じたことのない梓にしてみれば、これは有り得ぬことだった。なにごとにつけ、大げさなこと、賑やかなことの好きな映画界と異なり、新劇の世界は常に地味であったが、それでもなかには華やかに名を流す女優がいた。梓はそのなかでも地味に歩んできた女優であった。十一年前、新人公演のためにラシーヌの「ヘフェードル」を新しく訳してくれた生田俊行も、梓に渝らぬ好意をよせていたが、しかし二人のあいだは友人の域を出なかった。彼は三十八歳の今日まで独身で、も

し十年前に彼から申しこまれていたら、梓は彼と結婚していたはずであつた。彼にはどこか気弱な個所があり、劇団に出てきてもいつも控え目に他人の話に耳をかたむけているような人であつた。彼は、未来座の文芸部員としてフランスの戯曲をいくつか訳していた。彼にくらべると秋篠はなにごとにつけ派手だつた。秋篠の「春のいそぎ」の上演権をとつてくれたのは生田であつた。二人は、専攻の科はちがつていたが学校では文学部の同級生であつた。公演初日の幕あけ寸前に、秋篠さんあなたに御執心らしいわ、とかたわらにいた年上の女優からささやかれたとき、梓は不意に赧はにかみになったが、これはかつてないことで、あの方は聡明すぎて恋愛など出来ない質たちの人よ、などと出まかせに答えたが、初日いらい、秋篠の視線が他の女優ほなに向けられたときなどは、やはりそのことが氣になった。彼の目がちよつとも自分に向けられないのは、何かさびしい氣がした。

巢の恋

そして秋篠弘毅は七里ヶ浜の梓の家に通ってくるようになった。

梓の家には劇団関係の客が絶えなかつた。つまり梓は、数年前から、未来座での公演では必ず主役をつとめる存在になつていたのである。客足が繁くなりだしたのはその頃からであつた。尾山は週末にしか来なかつたが、彼が新劇の庇護者であるのは隠れもない事実だつたから、彼と梓の生活は、劇団の人達の前では公開されていた。梓が地方公演に出かければ、尾山とは一カ月も逢わないことがあつた。そんなわけで、梓が在宅しているときは客が絶えなかつたし、尾山も週末には必ずきてくれた。

「春のいそぎ」が好評だっただけに、未来座は、翌年の秋に上演する予定で、梓のためにもう一本戯曲を書いて欲しい、と秋篠に依頼した。秋篠はひき受けてくれた。「春のいそぎ」の終演日が十一月末だったから、あれからもう四カ月たつのに、秋篠には戯曲を書いている様子がなかった。おそくとも八月のはじめまでには原稿が欲しい、と未来座は言っていた。

2

四月はじめの木曜日の午後、七里ヶ浜の梓の客間では、生田俊行が一人で所在なさそうに煙草を喫んでいた。間もなく二時だというのに、女主人がおきてくる気配はなかった。

「お酒でもさしあげましょうか？」

茶をいれかえにきた富美子が生田に訊いた。三年前、梓が郷里の金沢から連れてきた女で、梓の遠縁にあたり、夫婦で梓の家に住込んでいた。今年二十六歳になり、かなりの美人で、夫は尾山の製粉会社に勤めていた。

「お酒はいい。秋篠とちがい僕は昼酒はだめだ」

「そういえば、秋篠さんが見えのようですわ」

と富美子は窓ごしの松林を見た。

生田が窓ごしに目を移すと、疎林のなかの一本道を、鉛色のコールテンの上衣を着た秋篠が、だるそうな歩きかたで登って来るのが見えた。

「秋篠さん、いろんな表情をもっていच्छやる方なのね」

「いろんな表情？」

「ええ。ひどくだるそうな顔を見せたかと思うと、つぎにはもう才気煥発かんぱつにみなさんと話していच्छやるし」

「あれは危険人物だ」

「あら、どういう意味ですか？」

「知らん方がいい、富美さんは」

このとき玄関が開く気配がしたので、話はここで跡切あとぎれた。富美子が出て行き、入れかわりに秋篠が入ってきた。

「マドンナはまだおやすみかい？」

「そうらしい」

「このうらかな日に安眠できるとは幸福なひとだな」

「なんだそれは、皮肉かい。尾山さんの前ではそんなことを言わん方がいいぞ」

「あの偉大な庇護者は鷹揚おうようすぎて、そこまでは深読みしないだろう」

そこへ富美子が茶を運んできた。

「火曜日に劇団に顔を出したら、催促しておいてくれ、と言われたが……」

「戯曲か。まだ一行も書いていなさうよ」

秋篠は大きなあくびをすると、それから茶をすすった。

「間にあわせてくれよ。まだ四カ月あるから大丈夫だとは思うが、君の間にあわないと、この秋は翻訳劇をやらねばならん」

「富美さん、このあいだ飲みのかしたブランデーがあつたでしょう、あれをくれないか」

「あら、あの日、秋篠さん、全部お飲みになられてお帰りになったのに」

富美子はおかしいといった顔で秋篠を見て答えた。

「では尾山さんのを一本持つてきてくれないか。ところで生田、これは実に馬鹿げた話だ。小説家が戯曲を書かねばならないなんて」

「なにを言いたいんだ？」

すると秋篠は、富美子が客間から出て行くのを見済ましてから、

「きみはむかし、マドンナのためにラシーヌを訳し、それが大当りをとったそうだね」と声を低めた。

「それは十年前も前のはなしだ」

「そのときなぜ結婚しなかった？」

「つまらんことを言うなよ」

生田はてれくさそうな表情を見せた。

「俺なら結婚したな」

「しかし、秋篠、あのひとは、尾山さんのような人がいたから、女優として成功したんだ。経済的な裏づけがあるから、映画やテレビに出る必要はなかったし、思い通りの芝居がみっちり勉強できたわけだ」

「話がちがう。女優になれるかなれないかは才能の問題だ。ラシーヌは尾山氏が庇護者としてマドンナの前に出現する以前の上演だ」

「それはそうだが、きみは、そんな話を誰から聞いたの？」

「夏山房子だ」

「あのお喋り女優め！」

生田は眉をひそめた。

「その口調では夏山房子になにか遺憾でもありそうだな」

「そんなものはない」

生田は慌てて打ち消した。

「遺憾がないとすれば、マドンナに対するきみの想いはいまだに続いているわけだ。夏山房子は才能はないが男から恨みを買うような女優ではない。その女を、きみはいま、お喋り女優め！」

と表現した。つまり、きみは、マドンナを庇っているわけだ。尾山氏とはちがった意味でね」

「判ったよ。きみは相変らず頭の回転が早い。……ことわっておくが、あのひとのいまの平静な生活を乱さないでくれ。きみは嗤うだろうが、……僕はとうとう白状してしまったようなかたち

だね」

「白状したというが、きみがここに通いつめていること自体が、白状しているも同じことではないか。それより、きみは、あのひとの現在の精神の平静さを信じているのか？」

秋篠はわらっていた。

「いまのあのひとのどこに乱れがある？」

生田はいくらか憤然とした様子で訊きかえした。

「きみが信じているのなら、それはそれでいいだろう。……舞台で演じられる役者の動きが、どれほど美しいかたちを表現しようと、所詮それは芝居だ、ということを俺は言いたかったただだ」

「それは、どういう意味だ？」

「俺は、あのひとでなければ演じられない芝居を一本だけ書く、ということだ。芝居でない芝居をね。だが、実に馬鹿げた話だ。俺はこの芝居のために、今年は小説は不作の年になりそうだ」

このとき、富美子が盆にプランダーの壺をのせて入ってきた。

「いま起きてお風呂に入ったところです」

と彼女はプランダーの壺をテーブルに移しながら二人に報告した。

「別に用があって訪ねてきたわけではないから、ゆっくりお入り、と伝えてくれ」と秋篠が言った。